未来への伝承

第189回

土浦藩主が描いた水戸道中
―土浦道中絵図―

江戸時代、土浦の城下町やその周辺は水上・陸上交通の要所として繁栄しました。陸路の中でも特に通行が多かったのが、水戸道中（水戸街道）です。この時代、幕府によって五街道が整備されましたが、水戸道中はそのうちの1つである日光道中（日光街道）の脇往還（脇街道）であり、日本橋から始まり水戸までつながる119㎞余りの街道でした。江戸時代当時、水戸道中は「水戸道」や「江戸道」、「水戸海道」、「水戸街道」など、さまざまな呼ばれ方をしましたが、幕府が作成した公式の文書などでは、「水戸道」や「水戸道中」と表記されています。

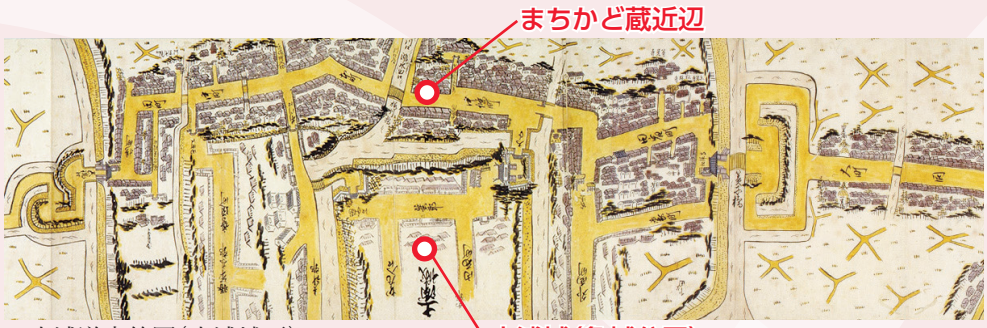
ところで、江戸時代の水戸道中はどのような姿をしていたのでしょうか。当時の様子を探る手がかりとなるのが、「土浦道中絵図」（市指定文化財）です。この絵図は、千住宿（東京都足立区）から中貫宿（市内中貫）までの道のりを描いた、全長18ｍを超える長大な作品です。道は山吹色に塗られ、宿駅には数多くの家や宿屋、問屋などが細かに描かれています。写実的ではありませんが、素朴なタッチで沿道の様子を描いています。

この絵図を描いたのは、土浦藩主土屋家の4代当主である土屋篤直（1732～76）です。絵図の末尾に記された奥書には、「宝暦八戊寅歳九月帰城之節改之自画之（ほうれきはちつちのえとらどしくがつきじょうのせつこれをあらためみずからこれをかく／宝暦8（1758）年9月に帰城した際、道のりを調べ、自らこれを描く）」と記され、3つの落款が捺されています。そのうちの1つには「篤直之印」と彫られていることから、宝暦8年9月に土浦城へ戻った篤直が描いたものであるということがわかります。このとき篤直は数えで27歳でした。

土屋家は1年の大半を江戸に常駐する定府の大名であり、当主が土浦に帰るのは年に3か月ほどでした。篤直が記した日記「土浦在城中覚日記」（国文学研究資料館所蔵）によれば、宝暦8年9月11日に家臣らとともに江戸を出立した篤直は、13日に土浦城へ帰城しています。篤直はこのとき目にした水戸道中の風景を道すがら記録し、「土浦道中絵図」として清書したと考えられます。

「土浦道中絵図」は長く個人所蔵でしたが、今年の3月から市で所蔵することになりました。市立博物館では10月20日（日）まで、この絵図と水戸道中を紹介するテーマ展「土浦道中絵図―描かれた水戸道中―」を開催しています。市立博物館での「土浦道中絵図」の公開は、昭和63（1988）年に開催された開館記念特別展以来36年ぶりのことです。この機会にぜひご覧ください。

問 市立博物館（☎824・2928）



▲土浦道中絵図（土浦城下）

土浦道中絵図（奥書）▶
右上に「篤直之印」が
捺されている